

ゲミレル島遺跡の構造について

東地中海の初期キリスト教遺跡調査から

中 谷 功 治

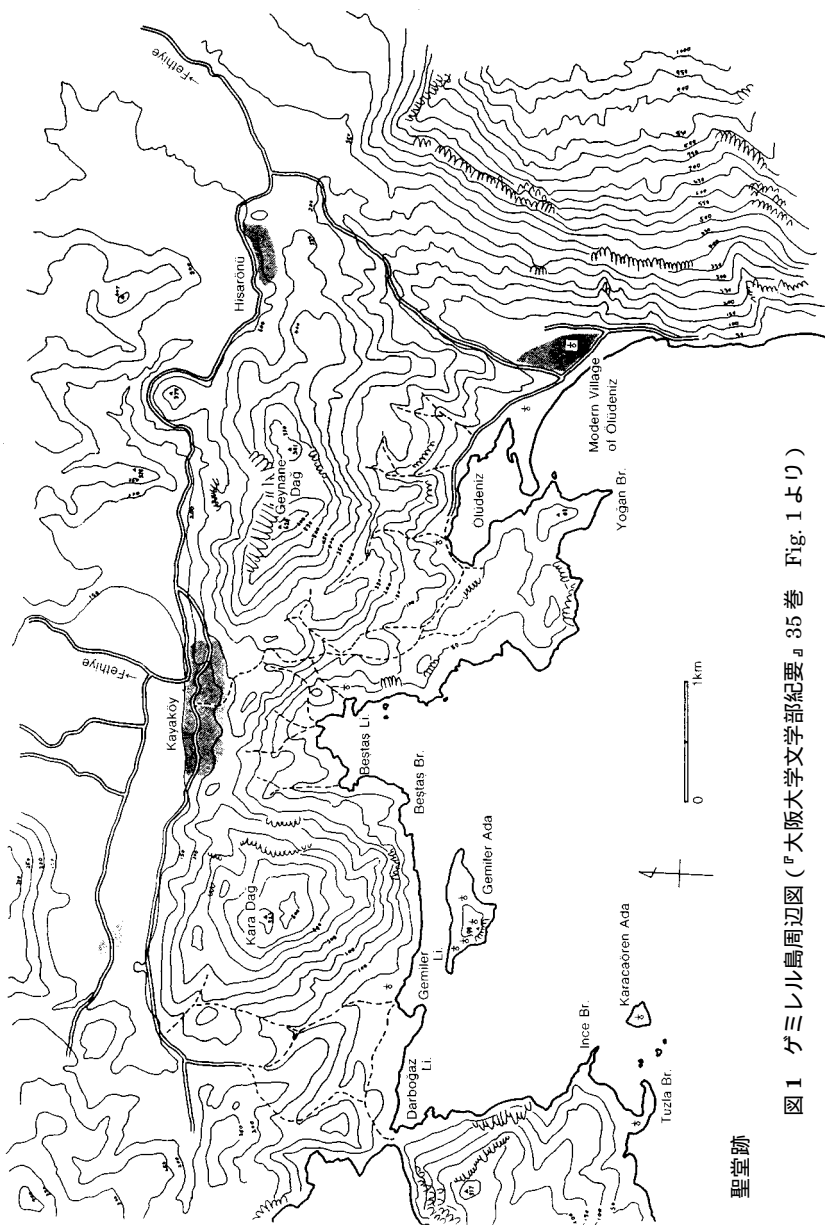
1. はじめに

ゲミレル島は小アジア南西部、古代リュキア西端の都市テルメッソス（現在のトルコ共和国フェティエ市）の南約 8 km に位置する小島である。現地はトルコ地中海岸でも屈指のリゾート地エリュデニズにほど近く（図 1 参照）、近年「聖ニコラオスの島」との触れ込みでシーズン中は数多くの観光客を集める。「リキア地方ビザンティン遺跡調査団」がこのゲミレル島を中心に付近の遺跡の学術調査に着手したのは 1991 年のことであった。

サーヴェイ踏査を主とする第 1 次調査では、ゲミレル島が 4 つのキリスト教の聖堂を擁する都市遺跡であることが判明した。また、南西に近接する小島カラジャエレン島の北西対岸のゲミレル・ビーチをはじめ、周辺沿岸部に 7 つの聖堂が点在することも確認された。さらに、サーヴェイの過程においては、聖堂を中心として残存するフレスコ画に加えて、カラジャエレン島の聖堂東にある半壊した墓から、破損は大きいものの彩り豊かな複数の人物画像が発見された⁽¹⁾。

1995 年からの第 2 次調査では、主な対象をゲミレル島の山頂付近に残る第 3 聖堂、いわゆる「聖ニコラオス聖堂」に絞り、遺跡の発掘を開始した。3 年

本稿は、リキア地方ビザンティン調査団建築班の太記祐一（福岡大学）、青木祐介（横浜都市発展記念館）、加藤耕一（東京理科大学）、桜井夕里子（早稲田大学大学院）各氏との共同作業の成果にもとづくものである。



聖堂跡

図1 ゲミレル島周辺図(『大阪大学文学部紀要』35巻 Fig.1より)

間にわたる調査によって、^{アプス}後陣を中心としたバシリカ式聖堂の東側聖域部分が、焼け落ちた往時の姿のまま出現した⁽²⁾。さらに 1999 年からの第 3 次調査では、聖堂の身廊や側廊部に発掘区域が拡大され、フレスコ画・大理石部材・レリーフ片など多数の遺物に加え、多様な動植物を精巧に描いた床モザイク、そして奉納銘文が発見された。これらの成果は内外の学界やマスコミによって注目を集めることになった⁽³⁾。

この遺跡がいつの時代に属するものなのか、いまだ決定的な証拠は見つかっていない。中世末に至るまで、史料はこの島について沈黙したままである。けれども、10 年以上にわたる調査で発見・確認された一連の事項、すなわち、銘文とその書体・バシリカ式の聖堂建築・床モザイクとその世俗的なモチーフ・残存するフレスコ画の表現様式といった美術史・建築史上の指標は、ゲミレル島が隆盛を見たのは古代末期、おそらく 6 世紀前後であったことを示している。もしもこの推測が正しいならば、この島は初期ビザンティン時代の東地中海地域において地方の繁栄の姿を現在にとどめる数少ない遺跡ということになる⁽⁴⁾。

本稿では、第 3 次調査において発掘調査と平行してすすめられたゲミレル島の遺跡分布の調査をもとに、この遺跡全体の構造の解明を試みる。比較的小規模なゲミレル島において広く展開している住宅群、また教会や墓域の存在、さらに廊下・長壁・大貯水槽などの一連の建築物について、調査隊によって作成された島の遺跡分布図をもとに残存状態や位置関係を紹介し、ゲミレル島の全体的な構造について考察したい。

2. 島の主な建造物

ゲミレル島は東西約 1 km、南北約 350 m の小島である。その南西部に位置する山頂（標高約 99 m：測量ポイント 29）からは、北東と北西の二方向に尾根が伸びており、島は地形的に大きく二つの区域に分かれる（図 2 参照）。

外洋に面した南側は常に波風に晒され、樹木もまばらである。山頂の西およ

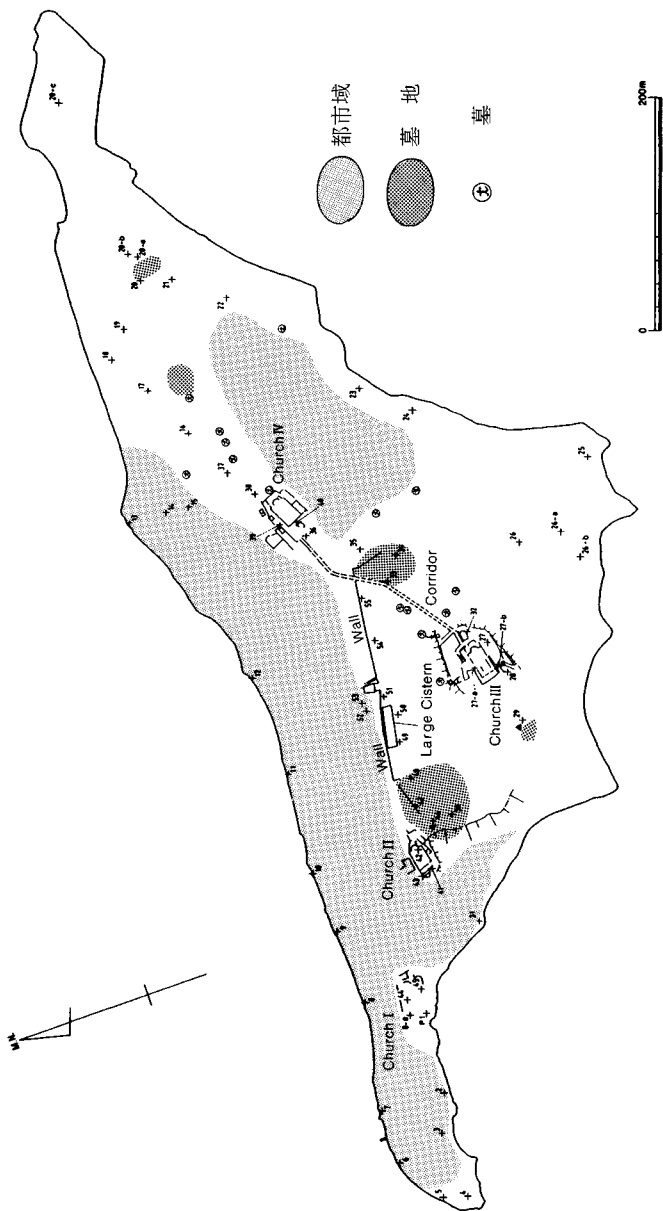


図2 ゲミレル島遺跡分布図



写真 1 ゲミレル島（南より - 大橋哲郎撮影）

び南側はかなりの急斜面となっていて、中央の緩斜面を除けば建造物はほとんど見られない。これに対し北側斜面は概ね緩やかで、現在は樹木がそのほぼ全域を覆っている。住居群を中心とした構造物が多く存在するのも島の北側である。ただし、島の東端部を含む一帯は南北ともに岩盤がむき出しの断崖となっている（写真 1）。

注目すべきことに、ゲミレル島に存在する宗教関連施設の大半は、山頂から延びる二つの稜線に沿って分布している。すなわち、北西へ延びる尾根の途中に第 2 聖堂、下りきった海岸近くに第 1 聖堂がある。山頂のすぐ東には第 3 聖堂およびその関連施設、なだらかに東へと下る稜線に沿っては廊下が第 4 聖堂へと続いている。第 2・第 3 聖堂や廊下の周辺には墓域が広く展開しており、比較的平坦な第 4 聖堂の東側にも、尾根の東端まで墓地や墓が点在する。一方、島の南北の両斜面においては世俗的な住宅域が形成され、北部沿岸には広く港湾施設が展開している。

以下、ゲミレル島の主要な建築物遺構について見ていくことにする。

A. 聖堂 Churches

ゲミレル島に存在する4つのバシリカ式の聖堂は、島の北岸西部にある現在の上陸地点に近い順に番号がふられている。上陸地点のすぐ南、南側を海に面して第1聖堂がある。この聖堂はバシリカ様式であることがかろうじて確認できる他は、波風のため現在はほぼ完全に崩壊している。東側アプス付近の建築や南側の洗礼室、アトリウムの泉と思われる貯水槽を残すのみである。

第2聖堂は、第1聖堂から南東方向へ住宅域を抜けたところに位置する。聖堂は岩盤の斜面を切り出した平坦面の上に建設されている。東西約30m、南北約15mの大きさは他の聖堂ともほぼ同じ規模になっている。現在は、トンネル状の通路を形成する北壁と南壁の東側半分、そして3つの窓をもつ東側アプスの半ドームがよく残っていて、アーチが海上からも確認できる。

島の山頂の東側すぐに位置する第3聖堂は、第2聖堂と同じく岩盤を掘り抜いて構築されている。南北にテラスをもち、南壁と西壁の残存状態が比較的よい。また、後陣東側には祭礼室をはさんで礼拝堂が附属している。なお、聖堂内は発掘が継続中で、後陣・聖域の全体と身廊・南北側廊の一部が床面まで掘り進められている。

第4聖堂は、第3聖堂東からの廊下が尽きた場所にある。床モザイクをともなったアトリウムや散乱する石材などからかろうじて聖堂であることがわかる程度で、周囲の壁体以外は瓦礫に埋もれたままとなっている⁽⁵⁾。

B. 廊下 Corridor : 写真2

第3聖堂のアプス後方からはじまり、尾根伝いに北東方向へと廊下が延びている。その幅は約3m、全長は約160mで、途中の急斜面(測量ポイント33付近)で北にやや折れつつ、その後東側に向きを変えて第4聖堂のアトリウム西に達する。廊下全体はヴォールト架構がなされていたが、現在は屈曲部を中心に一部のみが残っている。天井部分が残る急斜面では、通路には岩盤から切り出した階段が設けられている。また、南北両側の壁面には半径約0.9mのアーチ状の窓がほぼ5m間隔で続いている。かつて夏場に第3聖堂と第4



写真 2 廊下（長壁との交差点）

聖堂を行き来した人々は厳しい日差しを避けて、清涼な風を感じることができたはずである。

C. 墓 tombs と墓地 Graveyard : 写真 3

ゲミレル島に見られる墓は、大きく二つのタイプからなる。一つは岩盤を縦長に掘り抜いた竪穴式の墓で、葬られる人体に合わせた棺状をしている。キリスト教の習慣にのっとり、西を頭に東西方向に作られていることが多いが、起伏のある岩盤を穿つという条件から、それはあくまでも原則にすぎない。

もう一つは、ヴォールト天井をともなった構造物の墓である。しばしば妻側に入り口となる引き戸があり、おおむねようやく人が入れる程度の大きさである。墓の大きさは、葬られる人数にあわせてかなり多様である。なお、その他にもドームをともなった墓が二ヶ所で確認されている。

墓は島内のいくつかの地域に密集し、墓地ないし墓域を形成する場合が多い。

墓域 1 : 第二聖堂付近。第二聖堂南側の崖下に 15 基（内竪穴式 9、横穴式



写真3 ヴォールト型の墓

1), 第二聖堂の東側の長壁の北側に12基(内竪穴式3, 墓碑銘をともなうもの1), 第2聖堂南東の長壁の南側に33基(内竪穴式22)。この墓域は平面図上では一つの墓地のように見えるが, 実際には3つの領域相互のアクセスはさほど容易ではない。

墓域2: 第3聖堂周辺。山頂付近に竪穴式墓5基, 第3聖堂の北側テラスの周辺にドーム型とヴォールト型が各1基, そして廊下の北側に竪穴式が2基。また, 第3聖堂内の発掘にともない, 後世の箱式石棺墓7基, 石蓋土壙墓2基が確認されている。

墓域3: 廊下の南側とりわけ長壁の東端近くに集中する墓群19基(内竪穴式6)。

墓域4: 第4聖堂の東にヴォールト型の墓が5基点在し, その東には11基の墓が墓地を形成している(ドーム型1, 他はヴォールト型)。さらに尾根の東端に6基の墓がある(内竪穴式2, 他に墓関係では最大のヴォールト型建築物がある)。

その他に, 南側斜面東にヴォールト型墓が1基孤立してあり, 以上を合計

すると、これまでに確認できた墓の数は 121 基となる。

D. 長壁 Long Wall

ゲミレル島の北斜面の中腹には、東西に続く巨大な壁状の建造物がある。この長壁の全長は 250 m ほどに及んでいて、厚みは上部で 1 m 強、高さは場所によっては 5 m に達する。壁体の西端は第二聖堂の南にある絶壁の頂からはじまり、そこから東に向けてほぼ同じ高さの地形を進む。長壁は島の中央付近で尾根伝いに走る廊下と交差したところで一旦中断し、その後は南側に折れて 50 m ほど続くが、そこではほとんどテラス状となって終わる。

この長壁から山頂方向への登り口は、第 2 聖堂南東の墓域をつなぐかたちで二ヶ所、そしてちょうど第 3 聖堂の真北にあたる地点に 1 ヶ所が確認できる。後者の入り口幅は 1 メートル程度で、登りの階段が一部分現存している。さらに、この登り口の西側にはこの場所を防衛するかのように見張り櫓状の建築物が壁から迫り出している。

なお、前述したように長壁の南側の終点には西端部分と同様に多くの墓が確認できる。

E. 大貯水槽 Large Cistern : 写真 4

水源をもたず、また夏季に降水量が少なくなるゲミレル島では、島の至る所に雨水を貯めるための貯水槽が設けられている。それらの大半は、岩盤を一辺 2~3 m 程度に四角く掘って、床面と壁面を漆喰で塗り固め、天井を覆った小規模なものである。

そんな中であって図抜けた規模を誇っているのが、第三聖堂の北方向、長壁の内側に構築された大貯水槽である。内法が東西約 33 m、南北約 6 m、高さ約 6 m のこの貯水槽は、島で最大の建造物である。現状ではヴォールト天井は崩落しているが、長軸方向の南北壁面にほぼ 5 メートルの間隔で立ち並ぶ合計 10 本の柱は、その上端がわずかに内側に向かって曲線を描いていて、かつては伸び上がってアーチとなり、この大貯水槽のヴォールト天井を支えてい



写真 4 大貯水槽

たと考えられる。

西壁上方に設けられた窓から内部に入ると、内壁は二重の漆喰でひときわ分厚く塗り固められている。最も西寄りの柱の西側部分（現在は瓦礫に埋まっている）には北側に向けて排水口があり、長壁の外側にはこれに対応した取水口の泉が確認できる。一方、貯水槽への取水方法については詳しいことはわかっていないものの、排水溝と向かい合う位置の南壁上方に小さな穴があり、取水口の一つと考えられる。

F. 都市域 City Zones

ゲミレル島において、住宅と推測される建物遺構が集中しているのは以下の

地域である。

まず島の北側斜面では、海岸に近い地域を中心にそのほぼ全域にわたり建物跡が確認できる（ただし、東側の断崖は除く）。とりわけ第2聖堂および第4聖堂の北側は建て込んでおり、比較的大きな建築物遺構も広範に展開している。ただし、北斜面中腹に位置する長壁より高い位置には墓や聖堂を除き建築物はいっさい見られない。なお、島の西端部も、第一聖堂の周辺や南側の急峻な場所を別にすれば、建物によってほぼ全域が被われていたと考えられる。

これに対し、島の南側斜面では北側ほどに街区の発展は見られない。それでも、第4聖堂の南側を中心にしっかりとした壁体をともなった大振りの建築物が相当数存在している。

さらに、住宅域としての存在が予想される場所に第2聖堂西側の急斜面がある。建築物の大半は完全に崩壊してしまっているが、おびただしい量の瓦礫が斜面一帯を覆っている。

なお、こらら都市域における通路は、建物の間を迷路のように巡るかたちでは多数存在するものの、現状では南北あるいは東西に都市域を貫くような街路は確認できない。

G. 沿岸部 Waterfront : 写真 5

ゲミレル島の北岸は、陸地とは200 mほどの穏やかな水路に隔てられていて、水運に適している。実際、断崖となっている東側約400 mを除けば、その全域において人為的に掘削された跡が見られる。ただし現在、島は全体に数メートル沈下しており、かつての埠頭は水中に没している。したがって、残っている北岸の遺構はかつての埠頭や海岸通りに面した建築群ということになる。

興味深いのは、現在の北岸に沿って、岩盤を掘り込んだ小部屋のような区画が東西に規則的に並んでいることである。測量ポイント6から13付近までの約650 mの範囲について確認したところ、合計で102を数えた。切り出した石は建設部材への活用が考えられる一方、小部屋のようなスペースは周囲を壁

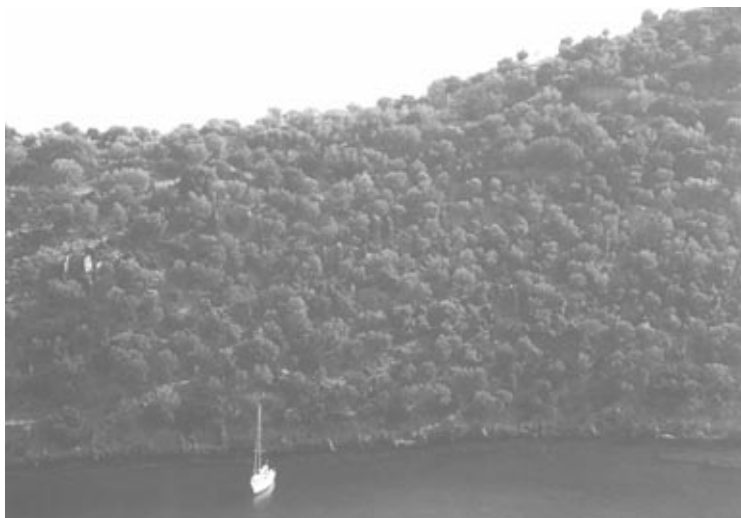


写真 5 北斜面と水没した埠頭

で囲むことで、例えば倉庫や店舗などに用いることが可能となったはずである。

多くの場合これらの区画には貯水槽が穿たれている。北岸は島でも飛び抜けて多くの貯水槽が確認できる場所であり、その数は確実なものだけでも 58 個ある。それらが寄港する船舶への水の供給を主な目的としていたことは容易に想像されよう。

さらに、区画同士の間には上部の住宅域からの排水溝が設けられている場合が多く、少なくとも 38 ヶ所を数える。同時に、そこには急な斜面を登るための階段が随所に設けられており、ステップが残存している箇所は 14 に及んでいる⁽⁶⁾。

ゲミレル島北岸には、広範囲にわたり港湾施設が構築されていたことが確実である。

3. 若干の考察

聖堂を中心とした宗教施設・住宅域・墓地・貯水槽・埠頭など、ゲミレル島の遺跡分布の特徴からは、この島が一定のまとまりをもった都市遺跡を形成していたといえるだろう。

かつてゲミレル島がかなりの人口を擁していたことは確実である。東西 1 km 程度の小規模なこの島に 4 つもの聖堂が存在すること自体、住民の多さを物語っている。それを裏付けるように、最大で千トン近くの水を溜めうる貯水槽が長壁の内側に構築されている。この壁が構築された時、すでに北斜面にはそれなりの住民がおり、その後も継続的な増加が見込まれていたのだろう。実際、住居と推測される遺構が北斜面を中心に建設可能な場所のほぼ全域に及んでおり、さらに島の西側急斜面や南斜面に拡張していったと予想される。

けれども、この小島が本来は多数の住民を養えなかったこともまた明白である。食料や燃料をはじめとして、必要な物資の大半は島外よりもたらされる必要があった。島の北岸に沿って数百メートルにわたって続く水没した埠頭がそのことを明示している。

ただし、島の対岸をはじめ手近なところに別の都市は存在していない。現在でも最寄りの集落までは、ボートで 30 分ないし対岸から車で 10 分を要する。なぜけっして便利とはいえないこのような島に多くの人々が生活する必要があったのか、疑問は依然として残る。

地理的な立地からいえば、ゲミレル島は地中海を往来する船舶に風待ちや、あるいは荒波からの避難のため格好の場所を提供できる。現在でも北沿岸にはヨットや観光船が毎日のように停泊する。しかし、そのために大規模な遺跡を残すほどの施設が必要であったとは思えない。この島について古代の記述が沈黙していることもまた、ゲミレル島には本来は都市としての発展の可能性がなかったことを示している。

ここで忘れてはならないことは、この島の宗教施設を中心とした構造的特徴

である。とりわけ、住宅域近くにある他の3つの聖堂とは異なり、山頂近くに孤立して存在する第3聖堂は注目に値する。北斜面の主要な居住域からは長壁によって隔絶され、主なアクセスとしては第4聖堂西から長く廊下が通じている。

この独特な廊下の存在は、島の住民というよりはむしろ第3聖堂への来訪者の存在を示唆してはいないだろうか。たとえば、東地中海を船で旅をする人々を迎える、地方の小規模な巡礼地という可能性である。あくまでも推測ではあるが、古代末期における東方の聖地を目指した巡礼活動の隆盛や東地中海での活発な海上交易の存在が、古代にはほとんど注目されなかった小島が、ある時期に急速な発展を見、多くの住民を集め来訪者を迎えた、という状況に対する現状ではもっとも妥当な説明であるように思う。

ゲミレル島からは、現在の通称である「聖ニコラオス」との関連を暗示する銘文が見ついている。中世にリキア地方を中心に航海の守護聖人として崇敬を集め、その後西欧に渡ってサンタクロースへと変貌を遂げる伝説上の人物、聖ニコラオスとこの島とのつながりについては、今後さらなる調査による解明が待たれる。

注

- (1) 第1次調査の主要成果については、Shigebumi Tsuji (ed.), *The Survey of Early Byzantine Sites in Ölüdeniz Area (Lycia, Turkey)*, *The First Preliminary Report* 『大阪大学文学部紀要』(35巻, 1995年)。なお、第1次調査では文部省科学研究費補助金 国際学術研究「リキア地方沿岸 古代・中世交易都市の美術、建築、都市計画の調査」(代表者 辻成史:平成3~5年度)を受けた。また、益田朋幸「聖ニコラオスたちの島 リキア地方のビザンティン遺跡と聖ニコラオス信仰」『地中海学研究』17, 1994年, 19-40頁を参照のこと。Asano, K., *Early Byzantine Site in Ölüdeniz Area, West Lycia*, in Frie-seinger, H. & F. Krinzingler, (Hrsg.), *100 Jahre Österreichische Forschungen in Ephesos. Akten des Symposions Wien 1995*, (Wien, 1999), S. 721-723.
- (2) 第二次調査の概要については、調査団による『聖ニコラオスの島 ゲミレル島 (トルコ地中海岸) の発掘調査』(Research Group for Byzantine Lycia, *Island of St. Nicholas-Excavation of Gemiler Island of Mediterranean Coast of*

Turkey, 1998)を参照。なお、第2次調査も第1次と同様に科研費を受けている。「リキア地方(トルコ南西部)沿岸 初期中世都市遺跡の発掘・調査」(代表者 浅野和生(愛知教育大学):平成7~9年度, 国際学術研究)また、浅野和生「聖ニコラオスの島 地中海岸ビザンティン遺跡発掘記 (1~6)」『SPAZIO』(日本オリベッティ), No. 54/55/56/57/58/59, 1996~2000年も参照のこと。

- (3) 「東地中海の港湾都市遺跡の総合的研究」(平成11~13年度科学研究費補助金基盤研究(A)2)代表者・浅野和生, 研究成果報告書, 2002年)。なお, 調査団の暫定ホームページは次のとおり: <http://www.jttk.zaq.ne.jp/sfuku239/lycia/index.htm>
- (4) 古代末以降のリキア地方については, Foss, C., *The Lycian Coast in the Byzantine Age*, *Dumbarton Oaks Papers*, 48, 1994, pp. 1-52。また, ゲミレル島についてのトポグラフィ研究としては次の文献が詳しい。Ruggieri, V., ΑΕΒΙΣΣΟΣ-ΜΑΚΡΗ-ΜΑΡΚΙΑΝΗ e S. Nicola: note di topografia Licia, *Byzantion*, 68, 1998, pp. 131-147; Sodini, J.-P., Restes byzantines au sud de Fethiye (Makri, Telmessos) en Lycie occidentale, in *ΕΥΦΡΟΣΙΝΟΝ*, vol. 2, Athens, 1992, pp. 549-560。さらに, V・ルッジエリ「古代末期からビザンティン時代へトルコ地中海岸(リキア, カリア地方)の都市遺跡と教会建築」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』8, 2000年, 197-214頁(益田朋幸・浅野和生訳注)。
- (5) ゲミレル島の聖堂については, 調査団の浅野和生・益田朋幸両氏によって詳しく紹介されている。『大阪大学文学部紀要』56-84頁。
- (6) 中谷功治「ゲミレル島北岸の遺構について リキア地方における初期キリスト教遺跡」『愛媛大学教育学部紀要(人文・社会科学)』, 31-2, 1999年, 1-12頁。

(本稿は, 日本西洋史学会第52回大会での部会別発表に, 2002年度の現地調査での成果を合わせて加筆修正したものである)

文学部教授